

新しい詩の声 2021 (第5回)・作品

〔最優秀賞〕

# 故永しほる

## 咬合

歴史に呼ばれて  
絶望を見つめながら  
これは、悲しみではない  
つたない過去を  
省みるために  
手渡されている  
千古の  
人々の  
それぞれに  
献身していた影の  
深いところから  
御廟であるかのように  
涼しい石を置く

人間が撤去された  
美化されて  
かたちを思った  
最後のページで  
ひとつの死が終わった  
古くからの書物  
現実を強化するために  
夥しい言葉を  
嘔み潰して  
血で濡れた  
沈黙をゆるして  
死者たちへ  
扉を用意する  
過剰に繁茂した

碑銘は意味を失い  
蝸牛の歯に  
コンクリートの  
壁が咀嚼されている  
数年後の  
私たちを想像して  
そこには共感がなく  
あるいはそれ以外になく  
勝利をすることで  
私たちは  
ゲームを続け  
無邪気に  
欲望をする  
はてしない  
中庭に佇立して  
みずみずしい系が  
これから克服する  
次の死の  
短い百年も  
ここから始まる

善人のために  
剪定され、飾られている  
二〇一号室は  
私のいない  
誰かではある  
物語で語り続ける  
ありふれた  
前線を死守した  
本当に敗北して  
肉体から最も遠く  
あれは、伝聞であると  
人間の代わりに  
無人のまま  
重たくなっていく  
現実がないことで  
人間の塔も  
ありあまる未完のための  
牧人のように  
あどけない夢を見る

〈優秀賞〉

## 瑠芙菜

### 初恋

大きな、大きな木の下にぼくはいて、世界を持って  
余しているよ

きみはやはり、きてくれなかった

葉は、ぼくの涙を隠すには、いくぶんささやかで、  
花は、ひと一人のために咲くには、どうしたって  
うつくしすぎる

だけどぼくは、音もなくスマホを叩いて、きみを  
赦すだろう

きみはやはり、こなくてよかった

この星は、ほんとうのことが、ひどく少ない

あの太陽はきつと、安心長持の「田」電球だし、

この風はきつと、さつき電気屋で見た、最新のや  
つだね、わかってる

白い月はたぶんリアルだけど、今にも雲に呑み込

まれてしまいうさだ、ふわふわの白いうさぎが、  
まだ、もたもたと餅をついているというのに  
たすけなきゃ！

そうだ、たすけられたら、うちで飼おうよ、きみ  
はなんて名前をつけるかな、ミミちゃんなんて、  
かわいいかもしれないよ、人参をあげようね

きみはやはり、ここにいたべきだった

そんなことを、あれこれぼくと、喋るべきだった  
んだ

スマホは沈黙して、気味が悪い、ぼくのメランコ  
リイをいっばい、詰め込んだかのように、黒い、  
カカオ分が高いだけのチョコレートみたいだ

いつそ、そうならよかった、そうしたら、これを  
使ってガトーショコラを焼いておくれよ、食後  
はきみと不細工なワルツなど踊るつもりで

そして

そして目を開けて、ぼくが温度をやさしく取り返  
したとき、この髪は、春の風にそよぎ、この頬は、  
あたたかい陽の光に色づくのです、

あるいはそれは、きみへの恋慕のために。

〔優秀賞〕

## 大西 久代

### 夏草の中の小さな花

住宅地からは

取り残された畑地が見はらせる

丈高く草々が生い茂る一角

永く人の手が入らない荒れ地に

時の経過が 幻として浮かびあがる

柔らかな土の青々とした賑わいがあった

ナスやキュウリ ズッキーニやオクラ

瑞々しい苗が手際よく植えられ

快活な声に包まれ 水はひかりを反射し

実りゆく夢が口々に語られた

誰の手からも遠い 見捨てられた地

隙を切り裂いて オレンジの色彩が

ひなげしの咲き姿を告げる

薄い花びらのうえを

風が慰めのように過ぎてゆく

細い茎に支えられ 夏草の勢いに抗するように

しなやかに咲いている

忘れられた土の奥底で

小さな命はひっそりとうごめく

除染作業が終わり

漂う荒れ地に足を浸し

刈り込みの作業ははじまる

記憶に残る豊穡な実りをよりどころに

棟深く湧きあがる熱

整地した土壌に

一株の苗を埋め込んだ男の心に

ひなげしの花は

ひっそり揺れていただろう

傷みの中 体を貫いて生れ出るものへ

小さなものが その視線を支えている

〈優秀賞〉

## オノ カオル

### 夜に朝

息子はわたしの過去。

父はわたしの未来。

息子は立ち上がり、両の足で歩む。

かつてわたしがそうしたように。

父は倒れ、車椅子を廻す。

いつかわたしがそうするように。

あまりにも柔らかな息子の太腿に触れ、

硬く冷たく曲がったままの父の左手を感じる。

食事をよくこぼす息子を見つめ、

涙をこぼしやすくなった父を案じる。

まだ話せない息子の声に耳を傾け、

言葉が少なくなった父の胸の内を思う。

ようやく生えてきた息子の前歯に噛まれ、

痩せこけた父の脚を見たときの痛みが走る。

息子を抱いて昇りゆく太陽の匂いを嗅ぎ、

父を抱いて闇を照らす月の香りを思い出す。

わたしが育てていく息子よ。

わたしを育ててくれた父よ。

生きてゆく息子よ、死んでゆく父よ。

かつてのわたしと、いつかのわたしよ。

すべての終わりのそのあとで、

父は私の過去になる。

息子はわたしの未来になる。

繰り返すのだ。すべての夜に、朝が来るように。

## 受賞のことば・受賞者略歴

### ●最優秀賞

故永しほる<sup>ゆえなが</sup>

#### 〈受賞の言葉〉

かつて経験した歯列矯正の、あの、重さのような痛み。私とは別の力で、身体が望ましくなっていく感覚。この詩を書いてそれを思い出したのは、私が言葉の外側に、抑圧にすらなりうる規範を設定していたからです。言葉が軋み、その負荷ごと詩を書くこととすると、言葉はいびつに整えられていきました。この言葉たちは、私の現実を咀嚼する歯です。この詩を光栄な賞に選んでいただいたこと、心から感謝します。ありがとうございます。

#### 〈略歴〉

1998年、北海道生まれ。「北十」同人。2020年、第1詩集『あるわたしたち』（私家）発行。作品以外の場所やSNSなどでは、大江那果を名乗る。

### ●優秀賞

瑠芙菜<sup>るうな</sup>

#### 〈受賞の言葉〉

このたびは「初恋」をお選びいただきありがとうございます。数ヶ月前のまだ寒い頃、私は詩を書きはじめました。はからずも受賞の報せを受け、大変光栄に思っています。

まばたきに潜む永遠に、私は芸術をとおして触りたい。難しいとわかっていながら、あこがれつづけるこの気持ちこそ、愚かで美しい人間の証明なのだ、いま、感じていきます。

#### 〈略歴〉

1993年生まれ。岐阜県出身。4歳よりピアノを始め、2016年、愛知県立芸術大学音楽学部器楽専攻ピアノコースを卒業。現在は音楽活動と並行して文筆業をおこなう。

●優秀賞

おむしひまよ  
大西久代

〈受賞の言葉〉

この度は、優秀賞に選出下さり、ありがとうございますございました。コロナ禍の日々、散歩に出かけた折に見た、荒れた畑地の惨状が詩作の動機になりました。何気ない風景の中に、人の営みの綾が零れ落ちていて、その事象を言語化する意義を思いましました。詩の糸口を探ることは、意識の底にあるものを触ろうとする事、小さなものが発する心音を聴き取る事ではないかと思えます。選考委員の皆様様に深くお礼を申し上げます。

〈略歴〉

岡山市生まれ、大阪府豊中市在住。

詩誌「裸足」「ア・テンポ」を経て、現在同人誌には無所属。

日本現代詩人会、関西詩人協会所属。

「コスモス文学新人賞」、「第7回詩と創造奨励賞」、「第16回日本詩歌句随筆評論協会賞 奨励賞」、「第35回国民文化祭みやざき 国民文化祭実

行委員会会長賞」等受賞。

詩集『風わたる』『海をひらく』

●優秀賞

オノカオル

〈受賞の言葉〉

息子は619gで生まれました。彼と過ごす日々の中で綴る文章は必然彼を語ることになり、同時に父とも向き合うこととなりました。

詩を見せた父からは「自分がメインは久しぶりです」と返信がきました。

人生の主役はいつでも自分なのだと思っていた節があつたので、少し動揺しました。

生意気にも詩について思うことは、やさしい詩を書きたいということです。

そして選んで頂いたからには、これからも書き続けることを誓います。

〈略歴〉

1982年東京都生まれ、北海道札幌市出身。

2003年に渡亜。

上智大学外国語学部イスパニア語学科を卒業。

コピーライター、16年目。

今年になって詩の執筆をはじめました。

これが初めての受賞です。

## 作品公募の概要

秋元 炯

日本詩人クラブでは、日本全国の幅広い方々と作品公募を通して連携し、詩文化の普及と発展に寄与したいと考え、「新しい詩の声」の公募を始めました。今回で第5回目の公募実施となります。作品募集は日本詩人クラブの会員ではない方を対象としています（会友の方は応募可能です）。応募作品の中から、最優秀賞（「新しい詩の声」賞）1篇と優秀賞（奨励賞）を2ないし3篇選び、賞状・賞金を授与するとともに、日本詩人クラブのホームページに、公募状況と受賞作品、選考経緯、授賞式の模様などを、また、詩界通信にも公募状況と選考経緯、授賞式の模様などを掲載します。

第5回「新しい詩の声」には、234名の応募がありました（昨年は167名）。応募者は、北は北海道から南は沖縄県まで、そして1名はアメリカからと、広い地域の皆様からご応募いただきました。また、10代の方が16名（昨年は5名）、このうち



女性が14名と、若い女性の方から多くのご参加があったこととなります。10代から30代の方を合わせると106名となり、ほぼ半数を占めています。最年少は14歳、最高齢は82歳の方で、男女の応募者数は、ほぼ同数でした。応募者数は昨年の約1.5倍と飛躍的に増加しましたが、新型ウィルス流行のため、出かけたがり人と会ったりすることが抑制される中、詩に向き合ってみようと思われた方が多くおられたということではないのでしょうか。

今後、受賞者以外の参加者全員に応募作品の寸評をお送りするとともに、昨年は実施できませんでしたが、ご希望される方にお集まりいただき、詩をさらに深く学び、詩を語り合う「フォロワーシップセミナー」を実施したいと考えております。

## 選考経過報告

秋元 炯

今回の「新しい詩の声」受賞者選考は、新型ウィルス流行の影響により、昨年に引き続き募集しでの開催が出来ず、メール交換による選考委員会

となりました。このため、3月26日に始まり4月17日に結論に至るという長い時間をかけた委員会となりました。今回の選考委員は、秋元炯（委員長）、網谷厚子、曾我真誠、高島りみこ、原詩夏（50音順）の5名でした。

先ず、予備選考では、234名の作品から、各委員が4月8日を締切日として4篇を推薦することにしました。その結果、選ばれた予備選考通過作は、以下の16篇（複数回答あり）です。麻生藤「かおりまとう」、天城サナオ「セパセント」、いちはじめ「これは詩ではない」、入間しゅか「冬の一滴」、江口久路「あの日の楽園」、大西久代「夏草の中の小さな花」、オノカオル「夜に朝」、勝部信雄「初霜」、こまゆ「わたし」、潮江しおり「内側に花卉が開く」、竹之内稔「ハA V たちの時間」、七まどか「ほとぼり」、堀内すゞ「夜雨に打たれて」、南久子「果実の向うには」、故永しほる「咬合」、瑠芙菜「初恋」（敬称略・50音順。以下同様）。

次いで第1次選考では、予備選考通過作16篇の中から、各委員が各々3編、推薦理由を付して改

めて推薦することになりました。この中で、複数の推薦があつた作品及び各委員がどうしても残したい作品を（これは各人1篇まで）第1次選考通過作としました。これは、以下の7篇です。「七パーセント」、「あの日の楽園」、「夏草の中の小さな花」、「夜に朝」、「果実の向うには」、「咬合」、「初恋」。

最終の第2次選考では、第1次選考通過作の中から、各委員が最優秀作1編と優秀作2篇を推薦することにし、最優秀作は2点、優秀作は1点を「得たとカウントし、得点順に最優秀賞1篇と優秀賞を3篇選ぶことになりました。同点の場合は、最優秀作に推された数が多い方を上位としました。この結果、最優秀賞には、「咬合」、優秀賞には、「初恋」、「夏草の中の小さな花」と「夜に朝」が決まりました。4名の受賞者のうち、20代の方が2名、30代1名、70代1名でした。今回は応募者数が非常に多く、予備選考を通過した作品は何れもレベルの高い作品揃いでした。また、これらの作品以外にも、独創的で個性の光る作品や作者の心情がひしひしと伝わってくる快作がたくさんあつたこ

とを申し添えておきたいと思ひます。

受賞作の、故永しほる「咬合」は、微妙に噛み合わないまま、それでもぎりぎりの意思疎通がなされていくという現在の人間関係を象徴しているかのような詩型。小気味よい展開のスピード感の中で、現代社会の滑稽さと虚しさ、絶望感が絶妙に表現されています。抑制を効かしながらもスピード感を保持するという、筆力の強かさも感じます。

瑠芙菜「初恋」は、思い通りにならない初恋のもどかしさ、揺れ動く心の揺れ幅の大きさを、瑞々しい言葉で表現した作品です。予断を許さない次々の展開が、傷ついた心情をリアルに訴えかけてくると感じました。

大西久代「夏草の中の小さな花」は、忘れられ見捨てられた原発事故被災地の現状をまざまざと思ひ出させてくれる作品。荒地の中のひとつ群れのひなげしの花は、なくしてはいけない希望を象徴しているのだと思ひます。

オノカオル「夜に朝」。幼い息子と年老いた父、

その二人を前にして、自らの人生の過去と未来を俯瞰的に見つめた作品。「すべては繰り返し返すのだ」という最終行に、諦念とともに前を向いて進んで行こうとする力強さが出ています。

## 選考委員

秋元炯（委員長）・網谷厚子・曾我貢誠・高島りみこ・原詩夏至